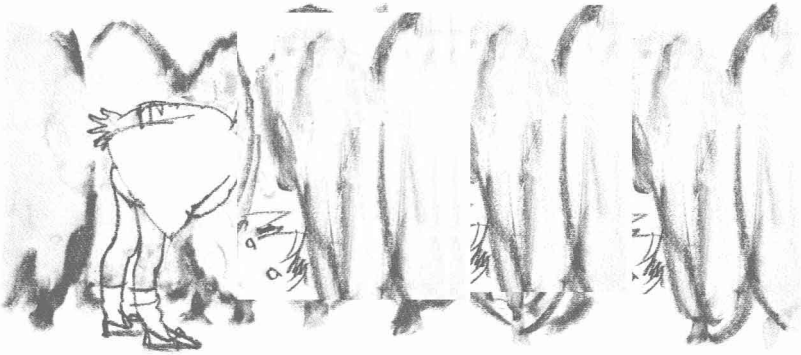
窓ぎわのトットちゃん

黒柳徹子



講談社

〈著者略歴〉
東京乃木坂生まれ。大田区の洗足池の近くで育つ。トモエ学園から、英国系ミッションスクール香蘭女学校を経て、東洋音楽大学（現東京音大）の声楽科を卒業。絵本や童話を上手に読めるお母さんになりたくて、NHK放送劇団の試験を受け合格。テレビの一期生となり、放送の中で育つ。「ヤン坊ニン坊トン坊」「魔法のじゅうたん」など子供むけ番組も多い。その間、劇団文学座の研究所、ニューヨークのメリー・ターサイ演劇学校などで学ぶ。商業演劇、新劇などの舞台出演も多く、また定期的にステージのワンマンショウも催す。第一回放送作家協会女優賞、日本婦人放送者懇談会大賞、テレビ大賞などを受賞。現在「徹子の部屋」「ザ・ベストテン」「音楽の広場」などに出演中。1979年、プロのアメリカろう者劇団（ナショナル・シアター・オブ・ザ・デフ）を日本に招くのに協力し、日本各地で一緒にまざって手話で公演した。今年で4年連続「好ましい放送タレント」の一位に選ばれている。著書「チャックより愛をこめて」「パンダと私」等。

窓ぎわのトットちゃん

1981年3月5日　第1刷発行
1981年5月15日　第8刷発行

著者——黒柳徹子

定価——1,000円

©TETSUKO KUROYANAGI 1981 Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112

☎東京03-945-1111（大代表）　振替東京 8-3930

絵——いわさきちひろ

装幀——和田　誠

印刷所——共同印刷株式会社

製本所——大製株式会社

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

0095-458403-2253（0）　（学2）

この本を、亡き、小林宗作先生に捧げます

目次

はじめての駅 9
窓ぎわのトットちゃん 12
新しい学校 21
気にいったわ 23
校長先生 26
お弁当 32
今日から学校に行く 34
電車の教室 38
授業 40
海のものと山のもの 44
よく噛めよ 50
散歩 52
(こうか)校歌 56
もどしとけよ 62

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

名前のこと　67
落語　69
電車が来る　71
プール　78
通信簿　81（つうしんぼ）
夏休みが始まった　83
大冒険　86
胆試し　93（きもだめし）
練習所　97
温泉旅行　101
リトミック　107
一生のお願い！　112
一番わるい洋服　117
高橋君　121
とびこんじゃダメ！　125
「それからさあー」　128
ふざけただけなんだ　136

運動会　140
小林一茶　147（こばやしいっさ）
とっても不思議！　150
手でお話し　155
泉岳寺　156（せんがくじ）
マサオちゃーん　161
おさげ　165
サンキュー　170
図書室　173
しっぽ　177
二度目の春　181
白鳥の湖　183
畠の先生（はたけ）　187
はんごうすいさん　191
「本当は、いい子なんだよ」　198
お嫁さん　201
ボロ学校　204

リボン 208
お見舞い 211
元気の皮 216
英語の子 225
学芸会 229
はくぼく 234
（ゆすあき）泰明ちゃんが死んだ 237
スパイ 241
ヴァイオリン 246
約束 249
ロッキーが、いなくなった 253
茶話会 259（ちゃわかい）
さよなら、さよなら 264
あとがき 266

●これは、第二次世界大戦が終わる、ちょっと前まで、実際に東京にあった小学校と、そこに、ほんとうに通っていた女の子のことを書いたお話です。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

はじめての駅

自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手をひっぱって、改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。そこで、改札口のおじさんに、

「この切符、もらっちゃいけない？」

と聞いた。おじさんは、

「ダメだよ」

というと、トットちゃんの手から、切符を取りあげた。トットちゃんは、改札口の箱にいっぱい溜っている切符をさして聞いた。

「これ、全部、おじさんの？」

おじさんは、他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。

「おじさんのじゃないよ、駅のだから」

「へーえ……」

トットちゃんは、未練がましく、箱をのぞきこみながらいった。
「私、大人になったら、切符を売る人になろうと思うわ」
おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。
「うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、一緒にやるといいよ」
トットちゃんは、少し離れて、おじさんを見た。おじさんは肥っていて、眼鏡をかけていて、よく見ると、やさしそうなところもあった。
「ふん……」
トットちゃんは、手を腰にあてて、観察しながらいった。
「おじさんとこの子と、一緒にやってもいいけど、考えとくわ。あたし、これから新しい学校に行くんで、忙しいから」
そういうと、トットちゃんは、待ってるママのところに走っていった。そして、こう叫んだ。
「私、切符屋さんになろうと思うんだ！」
ママは、おどろきもしないで、いった。
「でも、スパイになるっていってたのは、どうするの？」
トットちゃんは、ママに手をとられて歩き出しながら、考えた。（そうだわ。昨日までは、絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまの切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ）

「そうだ‼」

トットちゃんは、いいことを思いついて、ママの顔をのぞきながら、大声をはりあげていった。

「ねえ、本当はスパイなんだけど、切符屋さんなのは、どう？」

ママは答えなかった。本当のことをいうと、ママはとても不安だったのだ。もし、これから行く小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。小さい花のついた、フェルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道をとびはねながら、なにかを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。

「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる‼」

ママは、多少、絶望的な気分でいった。

「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」

二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

窓ぎわのトットちゃん

新しい学校の門をくぐる前に、トットちゃんのママが、なぜ不安なのかを説明すると、それはトットちゃんが、小学校一年なのにかかわらず、すでに学校を退学になったからだった。一年生で!!

つい先週のことだった。ママはトットちゃんの担任の先生に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「おたくのお嬢さんがいると、クラス中の迷惑になります。よその学校にお連れください!」

若くて美しい女の先生は、ため息をつきながら、くり返した。

「本当に困ってるんです!」

ママはびっくりした。(一体、どんなことを……。クラス中の迷惑になる、どんなことを、あの子がするんだろうか……)

先生は、カールしたまつ毛をパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻の毛を手でなでながら説明にとりかかった。

「まず、授業中に、机のフタを、百ぺんくらい、開けたり閉めたりするんです。そこで私が、『用事がないのに、開けたり閉めたりしてはいけません』と申しますと、おたくのお嬢さんは、ノートから、筆箱、教科書、全部を机の中にしまってしまって、ひとつひとつ取り出すんです。例えば、書き取りをするとしますね。するとお嬢さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン！　とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭を中につっこんで筆箱から〝ア〟を書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、〝ア〟を書きます。ところが、うまく書けなかったり、間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭をつっこんで、ケシゴムを出し、閉めると、いそいでケシゴムを使い、次に、すごい早さで開けて、ケシゴムをしまって、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、〝ア〟ひとつだけ書いて、道具をひとつひとつ、全部しまうんです。鉛筆をしまい、閉めて、また開けてノートをしまい……というふうに。そして、次の〝イ〟のときに、また、ノートから始まって、鉛筆、ケシゴム……そのたびに、私の目の前で、目まぐるしく、机のフタが開いたり閉まったり。私、目がまわるんです。でも、一応、用事があるんですから、『いけない』とは申せませんけど……」

先生のまつ毛が、そのときを思い出したように、パチパチと早くなった。

そこまで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行って帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだった。

『ねえ、学校って、すごいの。家の机の引き出しは、こんな風に、ひっぱるのだけど、学校のはフタが上にあがるの。ごみ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！』

ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう) と考えたけど、先生には、

「よく注意しますから」

といった。

ところが、先生は、それまでの調子より声をもう少し高くして、こういった。

「それだけなら、よろしいんですけど！」

ママは、少し身がちぢむような気がした。先生は、体をすこし前にのり出すといった。

「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」

ママは、またびっくりしたので聞いた。

「立ってるって、どこにでございましょうか？」

先生は少し怒った風にいった。

「教室の窓のところです！」

ママは、わけがわからないので、続けて質問した。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c